

この編集後記を書いている3月は卒業、卒部のシーズンである。私は学生時代はバドミントン部に所属しており、教授就任後は顧問をしているので、毎年、卒部式（俗にいう追い出しコンパ）に出席している。卒部生各々に、6年間の活動をたたえる表彰状を渡し記念品を贈る。その後、卒部生は1人ずつ挨拶をするのであるが、部活動のコンパとはいえ、この日だけは他の日とはまったく違って、全部員が黒を基調とした正装で来ている。皆が挨拶を真剣な表情で聞くため、卒部生のほうも緊張してしまい何を話すつもりだったかを忘れることがある。

先日の卒部式のこと。ある卒部生は、羽織・袴の正装で来ていたのだが、挨拶中に言葉に詰まるといきなり後ろを向いて、何かを袂から取り出した。「ケータイ」である。われわれの感覚では、そのような時に備えて、メモを書いた紙を、手のひらか、ポケットに隠しておくのが普通かと思う。袂から出現した「ケータイ」で例の親指操作をした彼は、次の言葉を見つけたのだろう、再び振り向いて話を続けた。和服とケータイの組み合わせにも違和感を感じてはいけなかった時代になったと、妙に印象的なシーンであった。

本号の扉には、阿部俊昭先生から、脊髄外科指導医であるご自身が脊髄の手術を受けた経験に関する一文をいただいた。いろいろ示唆に富む文章であるが、その中で印象に残ったことの1つが、自分の指導した部下に安心して手術を任せられた潔さである。今までのご自身の指導に対する自信のあらわれでもあり、上司がそのような指導ができることが理想であろう。永根基雄先生には、悪性神経膠腫の化学療法に関するよくまとまった総説をいただいた。テモゾロマイドの発売で化学療法が大きな転換期を迎えた感のある今だからこそ、この総説をしっかりと読んで、現在までの化学療法の流れと今後の方向を理解すべきであろう。岩間 亨先生からは、松果体病変に対する、いわゆる Stein のアプローチに関する詳しい手術手技の解説をいただいた。豊富な経験に基づき、きれいな多くのカラー写真でわかりやすく述べてくださっており、実際の手術に際してとても参考になる。その他、多くの優れた研究論文、症例報告、連載ものが掲載されている。

私は、スケジュール管理に便利な手帳を毎年追い求めてきたが、3年前から手帳に書くことをやめ、PDAとしてソニーのクリエを使い始めた。これはPDAとコンピュータのシンクロナイズが、複数のコンピュータで兼用でき、秘書さんにも同じ情報を持ってもらえるので、大変役立っている。ところが、ソニーがクリエの販売を終了してしまい、もし落として壊してしまったらどうしようか、と心配している。考えてみれば、スケジュール管理こそ、「ケータイ」で理論的には十分可能であり、実際その目的でケータイを使っている人も多いと聞く。早く好みに合うようなスケジュール管理ができるケータイが現れることを待ち望んでいる。